

〈第3部討論〉

討論は、フロアから寄せられた意見や質問に対して駒込武氏がコメントを加えていく形ではじまった。以下、内容を順次紹介する。

江藤源九郎は、台湾の地方制度改正に際し限定的参政権を認めることに攻撃的な論陣を張った人物であるが、植民地が「ファッショ」「右翼」的なものの培養地になり、本国にとっても重要な位置を占めていたのではないか、という岡本真希子氏の指摘に対して。——ご指摘の通りである。そのうえで、重要なのは、台湾での出来事が同志社での事件より前に起きた点であり、植民地は確かにそのような動きが起きやすい。

また、先ほどの寺崎コメントにおいて指摘された、「政策がある学校に及んでくるプロセスには、必ず人と法令が介在している」という点は大事であるが、台湾に関して自分が言うところの「排撃運動」とは、多くの場合「法令を飛び越えるもの」であり、軍人・右翼の存在を背景に、日本人の民間人や新聞が、法では強制できない次元において圧力をかけたことが問題である。台湾の場合は、法令で廃校になるのではなく、宣教師が先に折れて廃校に至ったのであり、日本の大島高等女学校の場合も宣教師が「自主廃校」を決めたことに注意する必要がある。一方朝鮮は、法令によって校長を罷免するという行政的措置がとられるものの、やはり宣教師の撤退決議により廃校が実現する。法令によって学校を「つぶす」ことができたのか否か、その場合の具体的手続きについては、寺崎コメントの指摘通り、検討を深めるべきであろう。

朝鮮の神社参拝には軍が関わっておらず、地方行政からの要請が発端であったこととの違いをどう考えるかと問う李省展氏に対して。——朝鮮でも、何らかの形で軍が関わっていると考えている。例えば台湾総督府で文教局長だった人物が、朝鮮平安南道の知事となり、中等学校長会議の席上で神社参拝を言い出すが、その折に軍人の姿が見られたという、あるいは知事が軍人に踊らされていたというアメリカ領事の観察もある。朝鮮総督府の御用新聞『京城日報』も、しばらくは

事件を報道して事態を煽るようなことをしていない。それは、事件が総督府の思惑を超えたところで動き出したことの表れではなかろうか。

同志社の諸事件に際しての各学校すなわち大学・予科・中学・女学校・高商等の関係、それらの理事会意思決定との関連、法学部以外の学部における動き等を問う大島宏氏の質問に対して。——籠谷次郎氏の研究でも、「御真影」奉戴をめぐる同志社諸学校の関係を示す興味深い事実が明らかにされており（駒込論考注（7）参照）、学校種別での動きを認識することは重要だと考える。

ここで駒込氏の一通りの応答が終わり、司会者の求めに応じて、フロアからの発言が続けられた（なお、同志社における宣教師追放過程に関する李氏の質問への回答は保留されたが、本件については田中論考「付記」が少々関係している）。

井上史氏から、和田洋一らの『戦時下抵抗の研究』執筆の前史として、京都大学人文科学研究所の渡部徹らが組織した現代史研究会により1930年代研究に関わる視点等が話し合われており、会誌等も発行していたことが紹介された。

大島宏氏から、先ほどの質問に関連し他大学の事例にそくした補足説明が行われた。——まず、1931年に立教学院が設立された時の寄附行為では、アメリカ聖公会から派遣された宣教師と日本聖公会の聖職信徒しか理事に就任できないこと、理事長はアメリカ聖公会から派遣された宣教師が就任することが記されており、この点は同志社とかなり異なる。その後、1940年の救世軍スパイ事件をきっかけに、教会の自給独立が叫ばれ、基督教教育同盟会の申し合わせ（1940年8月）もあって、立教学院でも数回にわたり寄附行為改正が図られる。そのプロセスにおいて、首脳陣（理事や理事長）から外国人宣教師が排除され、理事会の完全邦人化が図られた結果、1942年9月には、寄附行為中「目的」の文言からキリスト教主義教育をはずし、立教学院は皇国の道にのっとった教育を行う組織へと変わっていく。すなわち立教の場合は、理事の構成が日本人へとシフトしていくなかで、キリスト教が徐々に排除されていく状況にあった。

一方、関西学院の場合は、やはり基督教教育同盟会の申し合わせをうけて、1941年に寄附行為中の理事選出規程を変更している。この理事構成の変更を行った寄附行為改正の際には、日本人理事から構成された常務理事会において、寄附行為中「目的」に教育勅語にのっとりたる旨を含めようとする動きも見られた。しかし、外国人理事である宣教師が含まれた理事会では否決されており、外国人宣教師の存在がその実現を阻んだ可能性もあるのではないか。その意味で、外国人宣教師が運営に携わることが、学園のキリスト教維持に重要な役割を果たした可能性があるように思われる。以上の2ケースを同志社と比較してみても、理事会にキリスト教関係者、特に外国人宣教師がどれくらい入っていたかという観点がとても重要だといえるだろう。

大島氏の見解をふまえて、田中報告者が以下のように私見を述べた。——今回、「学園」ということばを初めて用いて、同志社諸学校を構成要素とする「総体としての同志社」を表現してみた。1937年の教育綱領承認以前から、中学校学則にだけは、教育勅語の理念がすでに取り入れられている。また、「神棚事件」の舞台となった同志社高等商業学校は、地元財界ひいては理事会とも関わる存在である可能性が高いのに、生徒の出自をはじめとするその特質が意外にわかっていない。同一学園内での各学校の関係や理事会の構成については、第1部や第2部で問題となった、他の国や地域の学校のケースとも比較していく必要がある。

司会の奈須恵子氏が、今回の共同研究報告は、理事会の構成や財界につながる校友陣の活動などに言及することで、従来の学校沿革史がどのくらいそれを明らかにしてきたのかを問いかけるものであり、同志社・立教・関学の間に確認できるその違いは、駒込氏の述べる「攻撃」や「攻撃への反応」のあり方を決定づける要因となった可能性がある、とまとめた。そして、キリスト教系学校の「自主規制」を生み出していく要因として、基督教教育同盟会の影響力は無視できないことを確認した。

そこで『キリスト教学校教育同盟百年史』編纂に関わった高瀬幸恵氏から、同

盟会の動きについて説明がなされた。——この組織は1910年に結成され、プロテスタント系学校を中心に構成されていた。駒込報告の扱う時期でいうならば、1936年に加盟校学校長会が開かれ、御真影を奉戴していない場合は速やかに奉戴することと、寄附行為についても改正を図ることを伝える旨が決定された。具体的には、「教育勅語の理念に基づいて」と掲げてから「キリスト教教育を行う」と述べるという趣旨の文書が配付されていた。当時、各学校に対しては、軍部・政治家のみならず、こうしたキリスト教界からの圧力・規制があったことに注意したい。

また高瀬氏は、駒込報告では、立教・関学などと比しても、とりわけ同志社に攻撃が集中した理由が問われていることについてコメントを加えた。——1933年に同盟会では、「基督教主義教育の要旨」の作成を試みる。端的に言えば、世間に対し、キリスト教教育は政策に協力するものであることを示そうとする文章であった。その際、草案に一番リベラルな態度を示したのが同志社であり、キリスト教教育の本質をこそ、積極的に述べるべきだと反論した。その事実から、加盟校のなかでも、同志社はリベラルな態度を示した学校であると認識している。

フロアの李氏から、再度駒込氏に質問があった。——日本では、同志社から排撃運動が行われているが、朝鮮の場合は、平壤というキリスト教のセンター的な場所から弾圧がスタートしている。先ほど、植民地はファッション化しやすいとの指摘があったが、「帝国のフリンジにおける実験の場」という意味合いがあったと思う。今回の催しの総合タイトル「磁場としての東アジア」にも関わるが、軍部や官僚には、「植民地＝実験の場」との意識がどの程度浸透していたのだろうか。駒込氏は以下のように応答した。——英米プロテスタント系学校のなかで最初に攻撃されたのが台湾、続いて朝鮮であるが、アメリカやイギリスがどう反応するかを日本軍はみていたのではないだろうか。朝鮮では領事が刻一刻とワシントンに状況を報告し、宣教師は排撃運動に対して動いてくれるようにと国務省に要求しているが、国務省は宣教師をエキセントリックな存在だとみなし、応えてくれ

ない。日本軍はこうした動きが起こるかどうかを観察した上で、同志社への対応を考えたのではなかろうか。平壤を攻撃することは、朝鮮キリスト教界全体を脅すことだったのと同じように、同志社を攻撃することは、日本のキリスト教界全体を委縮させる効果も計算されていたのではないだろうか。

伊藤彌彦氏はフロアから、寺崎氏のコメントが指摘した「人」の重要性に関わって、以下の事例を紹介した。——上智大学における靖国参拝問題は、マスコミが火をつけ軍部が関わっていく中で、問題が拡大してしまった。だが当初は、文部省のなかにカトリック信者がおり、学校との仲介役となって事態を押さえようと尽力していた。

最後に、同志社内の各学校の関係という論点に関わり、坂本清音氏が以下のように発言した。——中学は早くからキリスト教を捨て、末光信三校長はその環境に堪えられなくなり、高女部の校長に異動した。そこでキリスト教の教育あるいは礼拝を、1945年3月まで守った。4月に高女部は高等女学校へと改組され、以後、礼拝は学校ではなく同窓会で教職員が守られることになる。同志社内の男子の学校が矢面に立って弾圧される一方、同女はその陰に隠れ、目をつぶってもらえることもあった。男子の学校の施設を利用できた点なども含め、単立の女子校である神戸女学院や梅花女学校とは異なる構造の下にあった。両校と異なり、「同志社史」のなかで一章程度の扱いしか受けず、2000年になってやっと同志社女子大学単独の校史が編纂されたという状況であるが、そのように「陰に隠れた存在」であることの、いわばメリット・デメリットを有したのが同女だといえよう。

そして田中報告者から、同志社理事・評議員には割に女性が多いと感じたという印象が語られ、その事実に対する評価、あるいは同志社全体の運営に及ぼした影響について尋ねられた坂本氏は、メンバーシップは得るが意見は言わないという同女ならではの教育の質が存在したのではないだろうか、同女の教育を受けていない新島八重のような人間は別にして、卒業生はなべて校長になりたいというような意思はもたない傾向があるとの見解を示した。

以上をもって、第3部の討論は終了した。

(文責・田中智子)